

八木重吉の友だちになろう



八木夫妻と長女桃子

「胡蝶」へんぽんと ひるがえり かけり／胡蝶は そ
らに まいのぼる／ゆくてきだめし ゆえならず／ゆくて
かがやく ゆえならず／ただ ひたすらに かけりゆく
／ああ ましろき 胡蝶／みずや みずや ああ かけり
ゆく／ゆくてもしらず ともあらず／ひとすじに／あく
がれの／ほそくふるう 銀糸をあえぐ
「素朴な琴」 この明るさのなかへ／ひとつの素朴な琴を
おけば／秋の美しさに耐えかね／琴はしずかに鳴りいだす
だらう

「無題」 神様 あなたに会いたくなつた

詩歌編 その①

八木重吉という詩人の詩碑が、
柏市旭町の東葛飾高校のグラウン
ドわきにある。八木重吉の詩を愛
好する会が昭和六十三年に建てた
もので、重吉が大正十四年から昭
和二年まで、東葛飾中学の英語教
師として赴任したことを記念した
もの。東京生まれの詩人は、昭和
二年に二十九歳、結核でこの世を
去っているから、中学構内の教員
住宅に住み、柏の自然に触れて、
大半の詩が作られたようである。
中学の前に、三万坪の原っぱが

広がっていたという。詩碑にはそ
の原っぱが書きとめられた。

ずいぶん／ひろい原っぱだ／い
っぱんのみちを／むしように／
あるいてゆくと／／／／／
つくしくなつて／ひとりごとを
いうのが／うれしくなる

重吉の詩を「稚純」だといった
人がある。幼くて純粋、というこ
とか。短く平明な詩なのである。
だから物足りない感じもする。

存命中に発行されたのは、第一
詩集「秋の瞳」だけである。

生前自選の第二詩集「貧しき信
徒」は、昭和三年に刊行され、純
粋なクリスチャンの信仰と、その
家庭生活ぶりが同じクリスチャン
の気をえて、さらに大衆にも普
及していった。

長女桃子に続き、長男陽二が生
まれていくが、二人とも十四、五
歳で結核で亡くなっている。残さ
れた妻とみ子は後になつて高名な
歌人吉野秀雄と再婚し、吉野が定
本詩集をまとめている。

第一詩集の序文で、「私は、友
が無くては、耐えられぬのです」と
いい、「詩のことばがしずかな
空をたえまなくながれてくるよう
なきがする」とノートに記した重
吉である。短かったが同じ柏の住
民だったことは、なにかの縁、詩
を読んで友になつてあげよう。

